

第1回 富山市都市マスタープラン検討委員会 議事

日時 : 令和5年12月21日(木) 午前9時30分～午前12時
場所 : 富山市役所 議会棟8階 第3委員会室
出席者 : <委員>
久保田委員、姥浦委員、本田委員、川本委員、中村委員
星川委員、布目委員、田中委員、北岡委員、
佐藤委員(代理・事業対策官 谷氏)、金谷委員
<事務局>
活力都市創造部長、活力都市創造部次長、
活力都市創造部次長(技術)、都市計画課長、その他4名

1 開会

2 部長挨拶

3 委員長の選出、副委員長の指名

委員長 : 久保田委員 副委員長 : 姥浦委員

4 意見交換(事務局より資料に沿って説明→委員より意見交換)

① 都市マスタープランと現計画の概要、現計画の評価とコンパクトなまちづくりの必要性について

委員長 : ただいま、7頁までご説明いただいた。ご意見、ご質問はあるか。
説明を割愛された部分もあるので、その部分のご質問でもよい。

委員 : 公共交通の便利なところに住んでいる人が28%から40%となったとあるが、具体的にはどういうところ、どのようなことによって大幅に改善したのか。

事務局 : 富山市では公共交通が便利な地域として、都心地区と公共交通沿線居住推進地区を設定している。対象となるエリアは公共交通軸で、全ての鉄軌道と主要なバス路線である。地区内に居住地として選んでもらえるように居住誘導施策を実施したことが1つにある。また1つは、便利ではなかった公共交通沿線、例えば高山線や不二越・上滝線は運行本数が足りなかったもので、便利するための目標値を設定し、便利にしていたことにより、公共交通が便利な地域に加えた。これらの施

策により28%から40%と公共交通が便利な地域に住む人の割合が増加していった。居住誘導としてはインセンティブを与えて、誘導施策で移動してもらったというのがある。これ以外だと調整区域だった呉羽駅や東富山駅周辺を市街化区域に編入して居住誘導を図ったことも要因の1つであると思う。

委員：それぞれがどれくらい貢献したかもわかるか。

事務局：細かい数値もわかる。本日は持ち合わせていないが、今後はそのようなデータをお示ししながら、委員の皆様にはご説明していきたい。

委員：5頁のまちなか居住について、マンション建設がまちなか居住に寄与とあるが、マンションに移り住んできた人は、どういった層なのか教えていただきたい。東京から来たのか、他の地域からきたのか、子育て世代なのか、高齢世代なのか。転出元と年齢層がわかるのであれば教えてほしい。

事務局：市内市外の割合までは本日はお答えできないが、市内市外とも入ってきている。年代としても、ファミリー層も高齢者も入ってきており、幅広い世代の転入が見られる。また、もう一つ要因があり、都心地区では過去の統廃合により新しい小学校が2校あるが、その学校を選んで都心に入ってくる人もいる。都心地区は様々な世代が入ってきている状況にある。一方で、公共交通沿線はファミリー層中心で子育て世帯が多くに入ってきている傾向にあると考えている。

委員：この20年間をみると、非常に中心部に人が流れ、マンションが建ち、県外市外からのマンションの購入が多かった気がする。大きいものだと西武跡地にマンションができ、市内外から移り住んだ。中には、八尾のおわらを見るためだけに来た人もいる。実際に住んでいるかは別にしても、多種多様な方が県外から入って来た。その中でもコンパクトシティ政策は相当寄与していると感じた。また、宅地分譲も呉羽地区や大広田地区、今も東口の新駅も開発している最中である。この継続をある程度続けながら、今後は学生の流れるルートが重要であると思う。富山は石川と違って、学生が流れるところ＝遊ぶところがなく、住むところも五福に限られている。そこが不満と学生から聞いている。最近では青池学園が一番町に新しい学科を構えると聞いており、また学生がまちなかに来ることになる。そんな中で若い方たちの富山の居住、今後富山に生活の居を構えるといったところの支援をお願いしたい。

金沢では、石川県立図書館の近くに金沢美術工芸大学があるなど、1つの建物に対して周りが融合している。富山の場合は少し離れてい

るので、それをどうやって結ぶかであるが、それに対してお考えをご教示いただきたい。

事務局： 次の20年の方向性は今後検討していくことになるため、今は具体的なものは持ち合わせていないが、今言われたご意見も参考させていただく。

委員： 富山では今後、荒町電停の近くにスケート場と一体になった大きなマンションもできる。その北側には、北陸最高級のマンションの計画がある。そういったものも踏まえて、大きなビジョンをつくっていかないといけないと思っている。よろしくお願ひしたい。

委員： 富山市には約90の自治振興会がある。それぞれの地区では問題点をかかえて活動している。5頁に不二越・上滝線の資料があるが、不二越・上滝線の自治振興会では、活性化に向けて沿線自治振興会で協力して、乗客を増やすためのいろいろな努力をしてきた。市電と上滝線の直通運転の計画においては、富山市や地鉄の合意形成が難しいことや、技術的な問題もあり、沿線自治振興会の考えが達成できる方向には現在のところには至っていない。串と団子の形成ために沿線自治振興会が努力している。その点を認識し、また協力していただきたい。

事務局： 公共交通の活性化という点で、不二越・上滝線も公共交通軸に位置付けしている。市が進めるLRTネットワークの形成、全長25kmのネットワークの形成で、唯一実現していないのが、この市内電車の不二越・上滝線への乗り入れである。これは諦めたわけではなく、今後も引き続き検討していくとしている。当初は技術的に難しいところがあった、日々の技術革新で技術的にはクリアできるのではないかとこのところに来ている。問題はコストパフォーマンスであり、そこはまだ難しい点がある。市として検討は進めていくが、まずは、地元の方に利用していただき、沿線の自治会の方に働きかけや協力をさせていただきたいと考えている。

委員： ぜひご努力していただきたい。沿線自治振興会の当初の目的は、LRT化の促進であったが、市や地鉄の姿勢は、地元住民の乗客を増やしてくれという方向に変わってきたと考えている。まずは、そのあたりも努力をお願いしたい。

委員長： 現在の計画から連続した話題だったかと思う。今後のまちづくりをどうしていくか。まずは、現計画の評価とコンパクトなまちづくりの必要性に関して、他ご意見いかがか。

委員： 公共交通の活性化、LRTのネットワークに関連し、資料の7頁に車を自由に使えない人にとって極めて生活しづらいという記載があり、

私自身も車を持たず富山市内で生活していると、たまに生活しづらいと感ずることがある。引き続き都市の骨格形成に向けて公共交通のブラッシュアップという言葉があるが、ブラッシュアップの具体の方向性を教えてほしい。

事務局 : 具体的なブラッシュアップについては、現在、他課で、地域公共交通計画を検討しており、その中で施策を検討中となっている。まだ具体的にどういう方向性かまでは聞いていないが、今年度に計画策定となるので、それも踏まえて必要なものを都市マスに反映していきたいと考えている。

委員長 : 公共交通に関しては、先ほど別の委員から質問があった公共交通が便利な地域に住む市民の割合が28%から40%となったということだが、4頁の右上のグラフで、自動車と公共交通を使い分ける傾向に変化しているという富山市民の変化が表現されている。これは引っ越したことによる変化か、それともライフスタイルによる変化か。引っ越しに合わせて公共交通を使う人が増えてきたということなのかと思うが、そのあたりの理由はどのようなものか。

事務局 : こちらデータは他事業でのアンケート結果であり、現時点で内訳まで把握できていないが、引っ越しを機に通勤手段を変えた方も、ライフスタイルを変化によるものもいたように思う。このあたりももう少し調査していきたいと考えている。

委員長 : 居住地を変えずにライフスタイルを変えるのはすごくハードルが高く、一方で居住地が変わったことによりライフスタイルが変化したというのは割と自然なことのように思う。もしかしたらライフスタイルは居住地の変更にすごく関連するのではないかと見ている。だとすると、ブラッシュアップと、公共交通政策と連携した土地利用策の推進は非常に密接に関連していることだと思うので、そのあたりは考慮しながら、検討する必要がある。

委員 : 2頁の右下の図は20年程前に作られ、それが未だにけっこういろいろなところで使われている。当時は、コンパクトシティというと青森と富山の2都市が並んで取り上げられていたが、今では富山だけが残っている。なぜかというとな青森はコンパクトだけであったのが、富山はコンパクトとネットワークということで、そこは非常に優れた計画だった。条件の違いも大きいですが、量的にはかなり達成されたということが資料のご説明にあったと思う。

これからの課題としては、今一色に塗られている団子、資料ではオレンジ色の部分が、これからいろんな色になっていくのだろうし、そ

れを実際に具体的にどのように描いていくかが、土地利用なり、まちづくりの観点から言うと次の計画の一番大きな部分、これからの計画に重要な部分かと思っている。

その中で、6頁にあるように、マンションができ、いろんな方が入ってきたことは非常に素晴らしいが、一方で空き地や平面駐車場がかなり増えてきていることをどう考えていくか。空間として、街をどう考えていくべきなのかをもう少しミクロに考えていく必要がある。まず、物理的な街の構造の観点からどうしていくかが重要である。ソフトの話は地区の特色を生かしていくことだろう。

5頁の下の図、転入超過エリアの変化について、コンパクト開始当初は調整区域などの地域に転入ボリュームがあったものが、今はだいぶなくなってきたものの、まだ少し残っているというお話であったが、その中心となっているところはどのようなところか。

事務局： 現在、ボリュームが出てきているところは、市街化区域の縁辺と、また2つある都市計画区域の中では、非線引きの白地地域で比較的公共交通の沿線やバス路線沿線、幹線道路の近くなどである。特に婦中地域は熊野や宮川など、土地が安くて車さえあれば生活できるエリア、車で生活できるようなエリアの少し郊外部のようなエリアが最近少し目立ってきている。

② 本市の現状や見通し、社会及び時代の潮流について

委員長： 大変丁寧具体的に分析いただいているが、今のところに質問ご意見等あるか。

委員： 3点質問させていただく。

1点目、農地の転用について、公共交通の沿線の住民の増加は、転用可能な農地に余地があったことが要因の一つかと思う。今後それが展開していくという予測をたてられているが、農地転用は法的には歯止めがかけられない。おそらく土地が枯渇して、沿線の地価が上がってくると、どうしても地価と利便性の兼ね合いでバラバラと建っていくことが予想されると思う。逆線引きも富山みたいな混在が進んだところは難しいだろう。そのあたり政策として具体的にどのようなことができるかと考えているのか。

2点目は、団塊世代が亡くなっていく中で、富山は戦後、土地区画整理事業で宅地開発を一気に進めてきたところがいくつかある。そういったところとスプロール的に広がったところ、あとは元から農村が

あり、そのまま広がったところなど、地域の成り立ちにより、将来像が変わってくると思うが、そのあたりはどのように考えているのか

3点目は、郊外の人口が少ない場所は消滅していくも想定されるが、見ていると1人2人になっても、結構長く続き、なかなか消滅しない状況にある。そういうところもケアはしていけないといけないわけだが、そこは難しい問題かと思う。

事務局：まず1点目の今後の土地利用政策をどうしていくかについては、富山市ではコンパクトシティを進めるにあたり、公共交通沿線や都心地区の魅力を高め、そこに誘導するという誘導的な手法で進めてきており、規制強化では誘導的手法をとるところから、これまでの施策がある。今後については、具体的には内部でもまだ議論が出来てないので、ここについては今後もう少し慎重に検討していく必要があると思っている。急に規制強化に移るということは難しいと思うので、どういった形でどこをコントロールしていくかは、皆様のご意見いただきながら検討していきたい。

2点目については、地域によっていろいろ特性があると思いますし、今年度、既成市街地とお団子エリアを中心に、空き家や低未利用地がどうなっているかの調査をしている。この中で地域を分類して整理しているのですが、今日はお見せできないが、どういったところで空き地や空き家が多く点在しているかなどについても、皆さんに資料をお示ししながら考えていきたいと考えている。

3点目の地域の人口が少ない中で、どのように地域のコミュニティを維持していくかは重要な課題であると思う。今回、この後の論点でも出てくるが、郊外的生活像についても議論しながら、都市マスタープランへの反映についても考えていきたい。

委員：人口が減ってくる地域については、小矢部市の山の方などが先進地域かと思うので、参考になるのではないかと思う。

委員長：他にご意見はいかがか。

委員：市街化地域や駅近くの農地は、現状は法律に守られており、結構納税猶予というのが多い。この納税猶予は、田んぼを受け継いで、親などの名義人が亡くなった際に、その田んぼを相続した方がやったら、それに関しては税金がかからないというものであり、開発業者の農地転用を阻害している法律となっている。これがある限り、結局、農地は、20年間その方が亡くなるまで転用できない。民間が転用できない状況となっている。今現在残っている農地の3分の1はそういう状況のものであると認識している。これをどう組み込んでいくかが今後

の論点と思う。

また、空き家が街の中でも郊外でも増えてきている。この空き家も名義人不明が多い。名義は民間では調べられないため、行政の力で解決していく必要があると思う。空き家を持っている方は富山に住んでいない方が多く、県外、市外のみならず、海外という方もいる。その方たちにコンタクトを取ったときに、大体の方は孫が住むかもしれないと言うが、おそらく住まないだろう。ここに対し、どのように将来的に開発していくか。京都では空き家税をかけたりにしている。空き家について、どのような施策を富山市がやっていくかを明確に定めて、空き家を持たない方向でお願いしたいというメッセージを与えていく必要があると思う。

事務局：納税猶予の話は、国税の中では20年間動かないというのが実際あると思うが、一方で地方税の固定資産税は、本来の宅地の評価での課税となる。国税と地方税の違いがあり、その部分で実際に土地を持っている方がどう判断されるかだと思う。固定資産税を払うのはなかなか厳しい部分もあり、やはり転用しようというケースもあると、内部では聞いている。

委員：それは亡くなられた時にしかできず、途中ではできない。途中でそれをやると14%ほどの金利がつき莫大な金額となるので、結局できず、亡くなるまで20年間何もできない状況が続く。このような状況は非常に辛い。

事務局：現在、空き家対策は様々進めているが、国でも空き家特措法の改正など力を入れている。国の制度も参考にしながら、制度改正等も検討していきたいと思う。この都市マスの中でも空き家の増加は大きな課題と認識し、その観点でも検討していきたい。

委員：また開発阻害要因の一つに埋蔵文化財の遺跡調査がある。知らないうちに住宅に網がかかったりしている。ここに関しては、民間で遺跡調査をしなければならないが、莫大な費用がかかる。将来は転用開発していくのであれば、都市マスタープランの方で、将来的には開発業者に補助金を出すなどしていかないと、少なくとも1年半、長ければ2年～3年は工期が延びることになり、事業がなくなることもあり得る。開発業者としてはネックがそこにあるという認識を持っていただいて、今後の課題としてもらえるとうい。

事務局：我々としても埋蔵文化財の調査は制度として把握しているが、土地利用の観点でネックになるのは今回改めて認識した点である。今後の参考にしたい。

- 委員： 17頁に地域経済循環の数字が掲載されており、中核市比較の中で、第3次産業が伸びているということだが、2015年から2020年にかけては北陸新幹線の開業の影響は大きいだろう。特に駅前の商業施設等の開発が相次いだことで第3次産業が非常に伸びたのだと思う。次の計画期間は、その効果が剥落した状態から始まることになるので、第3次産業の振興については、地域循環を意識して進めるといったことが記載されているが、具体的に地域循環、経済循環を意識した産業振興や都市政策はどのようなものをイメージされているか。
- 事務局： こちらについて、まだ具体的な案はないが、関係部局と連携しながら、民間の方々に対し支援できること、連携することについて考えていきたい。
- 委員： 産業構造でいうと第2次産業は基盤としてある程度確立していると思うが、新幹線開業以降の第3次産業はどのようなサービス業で盛り上げ、まちなかでどのようなサービス業を展開していくか、また、どのように官民連携で進めていくかが重要であるので、今後議論させてもらえればと思う。
- 委員長： 第3次産業はコンパクトシティ政策と本来相性が良いと思っており、北陸新幹線の開業効果が今後ちょっと薄らいでいくだろうという中で、如何にコンパクトシティ政策の中で、第3次産業を支えていくかが大切である。コンパクトシティ政策も効果が出てきている一方で、富山市の中心市街地の密度は他都市に比べ低い中で、第3次産業がどの程度伸びていけるか。もっと何らかのサポートが必要になるかと思う。コンパクトシティ政策との相性が良い分野なので、ここをどううまく進めていくかが重要である。
- 委員： 第3次産業は重要であり、富山は女性の就業率が良い状況にあるが、第3次産業の中で働く機会が少ないと認識されると、女性が流出しやすくなると思う。
- 委員長： 富山の女性が富山から流出していくというのは非常に大きいことであり、その部分をどう捉えていくか。第3次産業のあり方とも非常に関連があり重要である。他いかがか。
- 委員： 資料の15頁にあるが、持続可能な都市経営、これに尽きるわけだが、ちょっと心配しているのが地域生活拠点であり、高齢化、人口減少がかなり進んでいるだろう。それをどうするかが大きな課題である。ヨーロッパでは小さな町でも結構都市再生に成功しているところがたくさんあって、そこでのキーワードはやはり交通だと思う。富山市での公共交通関連予算は1%程とのことだが、もう少し大きな予算で都

市再生していくことが重要なポイントではないかと思う。

事務局 : 我々としても、都心地区は見てきたところがあるが、地域生活拠点はどういった特徴で、地域特性に合った色をどう出していくかが重要と思っている。次のマスタープランで示していけるように考えていく必要があると考えている。

委員 : サービス業について、成功例として、富山市では岩瀬エリアが良くなってきている。お酒で有名な岩瀬の満寿泉の榊田酒造を拠点に、昔の文化、素晴らしいフランス料理、イタリアンなど、飲み物や食べ物、これらは県外の方から非常に高い評価を得ている。こういった成功例があり、南北接続もあった。こういった成功例をどんどん増やしていくことで富山のサービス業の価値が上がってくるのではないかと思う。北陸新幹線は3月に福井敦賀に開業するが、石川、福井、富山と繋がってくるので、どのように人や企業を誘致できるかと、我々としても3県が協力しながら行き来しやすいようにと考えている。この3県は生活圏内とも思っているので、広い視点で考えていただけたらと思う。

委員長 : 他、ご意見はいかがか。

委員 : 3点ほどある。

1点目は、現状の分析に商業施設の立地を入れていただきたい。レベル感が様々あるが、基本的に役所の支所に毎日行く人はおらず、暮らしの中で重要なのは、病院かスーパーであり、それを資料に入れたらよい。

2点目は、11頁の2045年～2065年の人口分布では、外縁部で人口増加しており、都市計画区域の外でも人口増加があり、増えてほしくないところで増えている気がしている。推計なのでどのような推計方法かというものがあるが、新しい人が入り、その人の子ども世代もそこにいれば持続性があるが、ひょっとしたら1世代だけで終わる団地やミニ開発的なものになる可能性もある。人口減少、世帯減少の中で、区域外の部分をどう考えるかは重要であり、今まで誘導的手法をやってきたことはよいが、それは世帯数が増える中ではよかったが、これからは世帯も減少することになる。空間として出てくるのは世帯数が一番効いてくる。世帯減少を本格的に迎えるという意味では、空間を考える上ではこれまでが助走、準備運動ぐらいに過ぎず、これからは本番となる。20年、30年、40年後に課題を残さないということが重要だと思う。

3点目は、今の話ともリンクするが、13頁の75歳以上の単身高齢者の現状分布で書いてあるとおり、45DIDやその直後に形成され

ているところはかなり多く空き家が増加していくだろう。そこをどうまわしていくかが非常に重要だと思う。要は外に行こうか迷っている人に、中にも選択肢があるということを示す。そういった人たちに40年後に余計な苦勞をしなくてよかったと言ってもらえるようなものを考える必要があるのではないか。量的にもこれらがどうなのかが、もう少しわかるようになっていくといい。空間的に本当にまわるようなものなのか。圧倒的に多くて、何をしても空いてきてしまうのか、どのようなレベルなのか。それとも、実は非常に少なく、やはり外にも開発が必要なのか。大雑把でよいので、抑えてあると良いと思う。

事務局 : 1点目の商業施設の立地は必要であり、市民アンケートでも、地域の方がどこで買い物しているか、病院に行っているかなどを聞く予定である。移動がどんなエリアで起こり、どのような生活をしているかを、今後示しながら、どのような土地利用を進めればよか考えていきたいと思っている。

2点目の外縁部での生活圏での人口増加や人口動態が変わり、空間をどうしていくかは考えていく必要があるので、今後どうしていくかも、皆さんと議論させていただきたいと思っている。

3点目も今後ミクロな点で分析していきたい。

委員長 : 人口減少下での都市計画は非常に難しいが、難しいことの1つの要因はやはり合意形成であろう。様々なものが人口減少下で減っていく中で、どこのどの施設を減らしていくかは個別的には本当に難しい話になる。ただそれは議論しないといけないことであり、現状分析をしっかりやって、客観的に示すことが重要である。今日の資料も、大変細かく、具体的に分析していただいているが、さらにこれを踏まえてわかることをしっかり書き込んでいかないといけない。

今ほど委員の指摘された商業施設の立地も大切であり、加えて私からお願いしたいのは、8頁に人口の長期的な推計があり、如何に富山は人口が急激に増え、そしてまた急激に減っていくかがよくわかるものになっている。右側には人口ピラミッドがどのような形状で推移してきたかが、人口レベルが左右で同じレベルでペアになっている。総人口は同じでも人口ピラミッドが全く違う将来になってくるわけだが、そんな中で、例えば2065年の40年後を見た時に、人口ピラミッドが安定し、長方形に近づいてくるようになっている。その際、どれくらいの労働者人口があり、現状と比べて何%ぐらい減るのか。人口が減ると直接的に生産量も減るのか、それがどういった未来になっていくのかということまで踏み込んで示していくことで、市民にとって

はよりわかりやすくなると思う。人口のグラフからは、労働者人口だけでなく、子ども数だとどうなるかも見える。そうすると、小学校のクラス数がどのくらい減っていくなども予測できるだろう。具体的に個別のものに当てはめて示し、共有することで、合意形成にも有効になると思うし、次の議論もしやすくなるだろう。

また、CO₂の排出量、廃棄物に関してもある程度推定できると思うので、入れていただけるとよいだろう。富山は買い物レジ袋の有料化など非常に早い時期から取り組んでおり、環境意識が高いと思われる一方で、ごみの排出量は意外と1人当たりが多い。過去からの変化などもお示ししながら、今のライフスタイルを続けると、環境にとってどのような影響を与えるのかを示していけると、より多面的に現状あるいは将来の分析ができると思う。

財政の見通しが14頁にあるが、長期的にみると歳出の需要額と歳入に見込み額の差が開き、本来求められている供給ができなくなる、そういう将来があり、特に民生費、土木費が大きいということであるが、例えば、土木費は都市のハードのあり方に直接的に影響する。現状の富山市が抱えているインフラを将来的な保持・維持が難しくなってくる。場合によっては、現状の寿命がきたらこの橋の架け替えはしないということをやっつけていかないといけない可能性も十分ある。そうすると、市民への告知はかなり早い段階で示していけないといけないだろう。様々なインフラがどの程度の老朽化レベルにあり、いつごろ老朽化の寿命にあるか、その先の更新があるのかないのか、そういった市としての長期的なインフラの管理計画を、財政の見通しを踏まえて、確定的なことは言えないにしても、現時点から見通せることから、インフラがどの程度維持管理できるかを市民に示していく必要があるだろう。

今日の資料では何億円の削減が必要というレベルまで示していただいているが、具体的にどの程度のインフラの物量となるのかをイメージして示していただけると、それを踏まえた議論ができると思うので、そのあたりも含めて整理いただければと思う。

他、いかがか。もしなければ次に進んでいきたい。

③ 次期都市マスタープランの策定に向けた視点や検討すべき論点の整理、論点の検証について

委員長： 19頁から22頁でご説明いただいた。ご意見はどうか。

委員： 富山市の住民はいろいろな地域に住んでおり、例えば市街地、郊外地域、中山間地域、沿岸地域がある。串とお団子の政策によって、拠点集中型の地域づくりがいろいろ評価されてきているが、中山間地域、山間地域の住民にとっては、衰退の危機を感じている。そんな折に、新しい市長がスマートシティ政策を提案された。今までのコンパクトシティの成果と評価を踏まえて、スマートシティをどのように発展していくのか、それが地域住民にとって希望になるのと思う。そこら辺の関連性を示してもらえないか。

事務局： 19頁では、社会及び時代の潮流として、DXの進展との調和があげられているが、これらは当然検討していく必要があると考えている。さらに策定に向けた視点としては、スマートシティ政策との融合として、コンパクトシティと連携してデジタルの活用を踏まえて検討することは重要と考えているので、都市マスタープランを策定にあたっては、委員のご指摘の内容も観点に踏まえながら検討していきたい。

委員長： 中山間地域の住民にとって、スマートシティは希望という発言であったが、まさにそういったものであり、重要なので記載いただきたいと思う。

他はいかがか。

委員： 11頁では2065年を予測があるが、中山間地域が消滅していくことが予想される地区もある中で、次期都市マスタープランの中ではどう具体的に考えていくのか。自然消滅させるのか、少し歯止めをかけるのか、そういったことをお聞きしたい。

また、富山の中で、それぞれのライフステージによって、住み替えができるような都市になっていくとよいと思う。人口が流出しないし、都市のネットワークというよりも、人間のコミュニティはハードな部分だけでなく、ソフトなネットワークで生活できるような街になるとよいと思っている。そうすると流入人口もっと取り入れることができるのではないか。

事務局： 13頁、⑦将来目指すべき人口分布の構築についての(2)で、郊外部や中山間地域では人口減少が顕著となる地域も増えていく中で、都市の持続性を保つ上でのあり方や市民生活への対応を考慮しておく必要があるということを記載させていただいており、お団子以外のエリアをどうしていくかを考えることも当然必要なことと考えている。人口減少で地域が消滅してしまうところが出てくることになるが、地域ごとの集落があるので、それをどう維持していくかは、どんな形で維持していくか、活性化させるかは、考える視点の一つかと思ってい

る。今具体的にどうすべきかをお答えすることはできないが、この視点もしっかり考えていきたい。

委員：空き家の問題と耕作放棄地の問題があるが、自然消滅していく地域があるのであれば、放置しないで自然に戻していく政策も必要ではないかと考える。

事務局：検討していきたいと思う。

委員：土木費も減少していく中で、今までお団子の中で住みやすい街にするため、歩道の整備や無電柱化などの施策を行い、魅力の創出に取り組んできた。お団子をどうするかという観点では、自然消滅する場所もあるかもしれないという中で、どうやってどこに集中投資していくかを考えていかないといけない。今後の議論の1つかもしれないが、地区ごとに個性やアイデンティティがある。県外の人がよく知っているような地区もあり、それをどう生かしていくか。議論というか探り出していく必要があると思う。今後アンケートもあるので、各地域の個性を引き出してほしい。団子の中にあんこをつめるのか、きなこをまぶすのか。そういったことを考えていけるとよい。

事務局：土木費については、これまでは市内一律の公共サービスの観点が大きかったが、これからは選択と集中の方向にシフトせざるを得ない状況にあると思う。各地域においては、地域の特色、アイデンティティがあるので、地域の特性に応じて公共サービスだけでなく、地域の方の自助や民間との協力を含めて、何かできることのないかという点で都市マスタープランにも将来像を掲げていきたい。

委員：22頁の論点4は、人口減少が進む中においては、郊外、中山間地域で消滅するような場所も出てくるという分析だったと思う。

1つの視点として、郊外については、高齢化により消滅もあるかもしれないが、今後40年かけてDXやデジタル化など、スマートシティ政策の推進を図ることより、不便を許容するような実は自然豊かな郊外に誘導できる可能性、そういう仮説もあると思う。拠点ごとの生活やライフスタイルを定義することによって、郊外で自然豊かで不便であっても、ネットなどデジタルで繋がっている、またはワーケーションできるスペース、そういったものを整備することにより、地域外から労働者、生産年齢人口を誘導できるかもしれないと思った。

2点目は、まちなかは公共交通が整っているので、駅前と中心市街地をどう結ぶかという観点で、1つはウォークアブル政策があると思う。駅からラストワンマイル、まちなかの賑わいを創出するという意味では、まさに中心市街地まで駅から歩いて楽しいまちづくりをする政策、

例えば、歩道を拡幅して、車が通れない空間を作り出すということもある。松山市ではそのような取組をされていると聞いている。そういった土地の規制のあり方もあるかと思う。

また、都市空間のあり方の中で言うと、まちなかで非常に駐車場が増えている。駐車場を抑制できる手段をとりえないか。まちなかに車がどんだんはいつてくることを抑制できる視点が必要なのではないかと感じた。

委員長 : ウォークアブル政策に関するお話だが、事務局から何かコメントはあるか。

事務局 : ご指摘いただいた視点も踏まえて、検討していきたい。

委員 : これまで自動車都市のあり方を大きく変えてきたが、自動運転は2065年までを見据えれば発展してくる可能性もある。郊外の高齢者しかいないところにとっては便利になるし、公共交通を利用しようという政策にしてみれば逆行するかもしれないが、高齢化しても車があるからよいということになるかもしれない。そういったところは論点の中でどう位置付けていくのか。

事務局 : 生活の中で、おそらく新しい交通の動きも出てくるだろう。新しい観点として踏まえながら考えていきたい。

委員 : 富山市のマスタープランのお話を聞かせていただくと、他市町村からは羨ましいと見られるのではないかと思う。公共交通や施設などのベースがあり、いろいろなことを考えていけるポテンシャル、可能性がある。

一方で、人口減少する中で、選択と集中をしなければならない、インフラへのお金の使い方どうしてもそうなると思う。

総論の話としては、どちらの方向かは難しいにしても、せつかくなので、とんがった視点で、エリアを定めてやると面白いのではないか。

18頁では、環境(GX)と激甚災害への対応など、比較的どこでもある内容の中で、地域ごと色が今後でてくるのであろうと思った。今後は市民アンケートされるということなので、どんな色が出てくるか楽しみにしている。

私自身、岩瀬の方のお団子の中に住んでおり、電車が変わってから確かに生活が変わった。働き場所が変わったせいもあるが、公共交通は非常に使うようになったが、ハイブリットというか車も使っている。それが実態かと思う。

また、空き家は増えている。それは課題であると思う。どんな風にそれが今後使われていくかは興味があるし、地域としてどう受け入れ

ていくかも考える必要がある。町内会同志の繋がりが強くなくても住める、受け入れるようになるのも面白いと思う。

また、女性の視点、若者の視点が大事だと思うので、ぜひアンケートに期待したい。

委員長 : 県と市の連携は非常に重要であり、今後富山市のまちづくりをより効果的に進めていく上では連携が欠かせないと思う。例えば、県庁周辺のエリアをどうしていくかについては、県では、既にいろいろ検討を進められており、WSが定期的開催されていて、富山市の方も何名か参加されていると思うし、大学の学生も参加している。いろんな主体が1つのテーマについて議論し、未来像を考えていくのは非常に重要である。県と市が連携し、同じ目標に対して議論した時にどんな将来像が描けるのか。描いた将来像をどうやって具体化していくのかの議論の後には役割分担があるだろう。将来像を一緒に考えることによって、個別に考えてはでてこないような魅力的な将来像が描けると思う。

また、20頁では2065年までを見据えてと書かれている。都市マスタープランとしては通常の20年間の計画を立てるということだと思うが、見据えるのはその先40年であり、その計画を実現していく仕組みを生み出していくということである。その40年間をターゲットとするために、60年先までの人口推計が先ほどの頁で出てきたのだと思う。2065年の40年先は人口構成が安定してくる時期であり、その先も人口が減少するが、人口構成が安定した状態で60年先まで減少していくということになる。40年先を目標地点として設定されるが、各世代ほぼ同じくらいの人口なるというのは、本来の姿に着地していくという形である。長期的に見れば、その地点を40年先の本来の姿にどうソフトランディングしていくか。これを踏めて議論していければよい。

他意見はいかがか。ではアンケートを説明お願いします。

④ 市民アンケート調査について

委員長 : すべて郵送ということだが、ご意見はいかがか。

委員 : だいぶすっきりしたアンケートになっているのでよかったと思う。

まだ、この時間で詳細までは確認できないので、もしよければ見た後にご意見させてもらえればと思う。これは1月の何日頃に発送予定か。

事務局 : 1月12日を予定している。

- 委員長 : ということは、あまり時間がないので、何かお気づきの点あれば早急にいただけたらと思う。
- 委員 : 私も何回か郵送のアンケート調査を行ったことがあるが、意外とこう答えて欲しかったのにこういう答えになってしまったみたいなのがある。かなり想定して、こういった結果が出るであろうということを検証するぐらいのアンケートを行った方がよいと思ったことがあるのだが、問3については、こういう回答になってくるのではないかとというような感触を教えてください。
- 事務局 : 問3の関しては、交通計画を作成する関係で昨年度少し似たアンケート調査を行っており、地域生活圏同士の繋がりを一定程度把握してきているが、今回、それをもう少しはっきりとした形、生活場面において繋がっている関係性が見ることができればよいと考え作成している。
- 委員長 : ありがとうございます。他にご意見お願いします。
- 委員 : 住民基本台帳から無作為に抽出されるということだが、年齢構成などはどう調整されているのか。
- 事務局 : 6000人の中で、一応年齢構成も10歳毎に割合を見て、回収率も一定程度獲れるように調整している。また、地域ごとの調整もしている。
- 委員 : 地域によっては高齢者しかいないところもあるのか。
- 事務局 : 14地域で分けており、それぞれの地域で各年代がいるようにはしている。その先には小学校区単位でも一人二人はいるようになっている。
- 委員 : 若い人は紙では回答しないような気がするが、回収率はどのくらい見込まれているのか。
- 事務局 : 最新の市民意識調査では回収率は36%であり、本調査も36%程度を見込み、配分を調整している。
- 委員 : 加えて、学生などに協力いただくとよいのかもしれない。
- 委員 : 構造が複雑なので、回収率については、若干心配である。
- 委員長 : 配布数は、人口構成、地区に細かく調整されており、富山市民の大学生にもある程度は郵送されるということと理解した。
- 委員 : 他課のアンケートの回収率の36%は、郵送だけなのか。
- 事務局 : その調査の際はWEBでの回答もあったが、これまでの郵送だけでアンケート調査した際も回収率は40%ぐらいとなっていた。
- 委員 : 若い人はWEBにすればけっこう答えるではないか。
- 事務局 : 実はWEBでも作成はしてみたのだが、問3の回答が大変複雑にな

り、ちょっと追っかけづらいという問題があった。検討した結果、この内容であれば郵送だけとしても、過去には回収率が40%ぐらいとなっていたこともあるので、郵送でデータを獲っていこうと考えている。

委員長：細かく見る時間がないので、お気づきの点があれば、早急にご意見いただきたいと思う。

アンケート以外でも、全体を通して他にご意見はいかがか。私から1つの観点として、これから高齢化がさらに進んでいく中で、お年寄りの生活をどのように支えていくかが重要であるが、子供たちに対するまちづくりのあり方も重要である。お年寄りとお年寄りに共通していることは、交通弱者、車の運転ができないという点である。高齢者でもドライバーの方はたくさんおられるが、その方々も状況によってはいずれ限界が来る。自由に車が運転できないという意味で、今日の資料の中に車の運転ができない人にとって暮らしにくい街ということがあったが、そこは改善し、どんな世代にあっても暮らしやすい富山市を作っていかなければならないと思う。今は、どこでも車で行くライフスタイルが定着しているが、それをどう転換していくか、居住地の選択を公共共通が便利なところにより一層誘導することが必要となってくる。その時、まちなか、駅前には現状では車がバンバン走っているが、もう少し、歩行者のための空間に変えていくことができないか。公共交通を守るにしても、車が富山駅前をどんどん通過している状況が、本当にこれからもあるべき空間なのかを考え直す必要があると思う。如何に歩行者にとって暮らしやすい都市空間を造っていくかが非常に大切であり、お年寄りや子供たち、すべての人にとって暮らしやすい空間になると思う。そういったことも長期的な観点としては必要だろう。

他、ご意見はいかがか。特になければ、最後の今後の取組予定の説明をお願いします。

⑤ 今後の取組予定と内容について

委員長：質問があればお願いしたい。

委員：まだこれからの検討事項だと思うが、先ほど申し上げたように、これまでどちらかという大きな骨格を造っていく計画だったので、市が主導で、市の計画として作っていくことで良かった気がするが、今回は、その中身をどうするのがおそらく中心になると思う。先ほ

ども色をどうするかの話を上申したが、どのように連携するのも話題もあったように、こういった話の中で非常に重要なのは市民や、これからのまちづくりを担う学生世代などが何を考えているということだと思ふ。

1つはアンケートでそれらを把握することは全体を見る上では重要であるが、もう1つは、地域別構想レベルになった時には、もう少しテーマ別の話があってもよいかと思ふ。こういった部分は、我々が主導し、市で作ってくださいとなるよりは、地元レベルで自分たちがどういう地域にしていきたいか考え、そのためには自分たちはこういうことをやっていくので、そのサポートをしてくださいや、こういう役割分担でやっていきましょうなど、そういったところまでいけると本来的にはよい。このため、単純に市が作って説明会という形で説明するよりは、むしろ地元の人たち責任をある種とっていただくような形になるかもしれないが、考えていただくというのが、プロセスとして非常に重要であり、その後実現させていく意味でも重要であると思ふ。単純な説明会ではない方がよいと思っている。

委員長 : 大変重要なお指摘だと思ふ。地域主導で、自分たちがまちをつくっていくという思いを調整しつつ、都市マスタープランに反映していくということだと思ふ。事務局、それについてはいかがか。

事務局 : 前回の都市マスタープランをつくった際は、地域別構想を作った後に地域別説明会を開催して富山市の形を整理する流れだったが、今回は市民説明会と説明したが、1回は地域別構想を作る前に市民の方の意見を聞くような機会を作っていきたいと思っている。具体的にどのような形とするかは、次回、皆さんにお示ししながら進めていきたいと考えている。

委員長 : 他ご意見はいかがか。

では、長時間にわたり、大変熱心が議論をいただいたと思ふ第1回の議論としてはこれで終了したい。進行を事務局にお返す。

事務局 : 久保田委員長どうもありがとうございました。それでは以上をもちまして、第1回富山市都市マスタープラン検討委員会を閉会とさせていただきます。委員の皆様、本日はどうもありがとうございました。

以上